

『歴史の精華』第三巻にみる  
サファヴィー朝の政治文化に関する予備的考察

前田 弘毅  
(北海道大学)

**Political Culture of the Safavid Dynasty  
Reflected in the Third Volume of *Afzal al-tavārīkh*:  
A Preliminary Study**

MAEDA, Hirotake  
Hokkaido University

The purpose of the paper is to clarify the character of the elite culture of the Safavid Dynasty analyzing the description of the third volume of *Afzal al-tavārīkh* by Fazlī Khūzānī al-Eṣfahānī.

Dr. Melville who discovered the manuscript already presented a highly valuable paper on its character. However much work is needed to recognize the specific features of the above-mentioned chronicle. In the paper, the following topics are discussed mainly in comparison with the description of Eskandar Beg's chronicle.

1. Description on family relationships. Fazlī's chronicle contains much personal information on their kinship and marriage alliances; for example about the children of Amīr Ḥamze Ṭālesh, Moḥammad Solṭān Beygdelī and his brothers, and about the children of Bektāsh Khān *beglarbegī-ye* Marv. Fazlī also tells about the patron-client relationships among *amīrs* in detail, most of which are unknown up to now because Eskandar Beg refers rarely to such things.

2. Description of the members of the royal household. Eskandar Beg gives few date on the family of Shāh 'Abbās and his haram. By contrast Fazlī describes these things without hesitation. Especially interesting is his narrative of the events of the assassination of Ṣafī Mirzā. Fazlī gives a story that firstly Qarchaqāī Beyg, then Mirzā Khān Ṭālesh were ordered to kill him but refused. The assassin, Behbūd was the third to be ordered to kill the prince. This is partly the same as Mirzā Beg's chronicle but Fazlī's description goes

---

**Keywords:** Persian Historical Sources, Kinship and Social Bonds, Safavid Royal Family, Provincial and Diplomatic activity, The Caucasus

**キーワード:** ペルシア語史料, 家族的紐帯, サファヴィー朝王室, 地方行政・外交, コーカサス

further and is more detailed. As for the loss of Prince Moḥammad's sight and treatment of blind princes, Fazlī adds new information. Fazlī often refers to the most powerful woman of the time, Zaynab Beygom, and to princesses in marriage with *vālī* family and powerful amirs. Fazlī feels relatively free to describe 'Abbās I's reign since he worked in the provinces and after that spent his days in India.

3. One of the most important and meritable aspects for academic studies is the description of the local administration. It contains many personal names and offices thus seriously increases our knowledge of personal careers and the actual situation of local authorities and their relationship with local people. Fazlī also frequently mentions diplomatic missions to the Ottomans and the Mughals, sometimes using the networks of his relatives of high rank in the central and provincial courts.

4. As a vazier of Barda' and Kakheti, Fazlī's work on the Caucasus is especially worth mentioning. He even cites several Georgian words and gives us detailed information on Giorgi Saakadze (Mūrāv Beyg) and other Caucasians who had close relationship with Safavid powers. The revolt of the Georgians in 1625 caused Fazlī's temporary unemployment. He gives very detailed information of this event.

Conclusion: All this is precious information for understanding the Safavid political culture of that time. Especially his reference to kinship and marriage alliances casts new light on the state of Safavid elite society. As well, the description of provincial officials and administration more acutely reflects the transition of Safavid policy into centric and so-called *khāṣṣe* administration than does Eskandar Beg's chronicle.

In short the third volume contemporary to Fazlī's lifetime is the main volume in a true sense.

- |                                     |               |
|-------------------------------------|---------------|
| I はじめに                              | 2 王族に関する記述    |
| II 写本発見の経緯とその概要                     | 3 行政・外交に関する記述 |
| III 記述内容の特徴：『世界を飾るアッパースの歴史』との比較を通して | 4 コーカサス情報     |
| 1 家族関係に関する記述                        | IV 結びにかえて     |

## I はじめに

1980年代以降、それまで停滞していたサファヴィー朝期イラン研究は活性化し、歴史・文学から美術まで幅広いテーマが取り上げられるようになった。宮廷年代記や地方史料をはじめとする多くのペルシア語史料の公刊も進み、史料が不足していると考えられて

きた17世紀後半に関しても、オランダやイギリスの東インド会社に残された文書など、欧文史料を用いた新たな研究が次々に発表されている。また、旧ソ連地域における史料の利用と研究の参照も容易となりつつある。史料状況の変化と旺盛な研究熱に促され、諸学問を横断する研究成果を発表する場も増加した<sup>1)</sup>。

このように、サファヴィー朝期イランに関する研究は近年大きく前進した。しかし、政治史に限定して言及すれば、必ずしも充実した成果をあげてきたとは言い難い。その要因の一つは、王朝の国家体制が宮廷中心の支配体制に移行したとされるシャー・アッバース一世期（1587-1629年）に関する研究の遅れにある。このため、16世紀から17世紀にかけてのサファヴィー朝の姿を連続して捉えた王朝史の構築は容易ではない。

王朝の画期とされるアッバース一世の42年にわたる統治であるが、意外にも、その治世を網羅した史料は多くは残されていない。エスキャンダル・ベイグ・トルキャマーン Eskandar Beyg Torkamān によって記された『世界を飾るアッバースの歴史』(TAA)<sup>2)</sup>を除くと、アッバースの治世前半に関する数点の史料が知られるのみである。アッバースが信頼していた宮廷の天文長官 *monaj-jembāshi* ジャラルール・ウッディーーン Jalāl al-Dīn による『アッバース史』(TA) は、別名『ジャラルールの日記』とも呼ばれるように、宮廷内部の様々な情報を日付入りで伝えるユニークな史料であるが、1020/1611年の記述を以って終了する。『サファヴィー家の庭園』(RS) はアッバース治世末期（1036/1626-27ないし1038/1628-29年）まで記述している<sup>3)</sup>。しかし、分量が少ないうえに、著者ミ

ールザー・ベイグ Mirzā Beyg の経歴がよく知られていないなど、質量ともに問題がある。したがって、いずれもアッバース時代の中央宮廷の変化を把握するに足る十分な史料とはいえない。

こうした状況の中、アッバース一世の治世初年度から最終年までを記録した大部なベルシア語年代記が、数年前にイギリスで発見された。これが、本稿で取り上げる『歴史の精華』第三巻(AT III)である。著者ファズリー Fazlī b. Zeyn al-‘Ābedīn Beyg Khūzānī (1593年頃誕生—1639年以降に死去)は、アッバース一世期に活躍したタージーク系官僚である。『歴史の精華』第1巻と第2巻第1部については、それぞれケンブリッジ大学図書館(Cambridge University Library, Eton-Pote ms. 172)と大英図書館(British Library ms. Or. 4678)に所蔵されている写本が知られてきた<sup>4)</sup>。しかし、著者にとって同時代の記述となる第三巻の存在が今回初めて公となったのである。

本稿は、この新発見写本の概要について紹介し、その史料価値を論じることを目的とする。

## II 写本発見の経緯とその概要

発見者であるケンブリッジ大学教授メルヴ

- 1) 2002年9月、ロンドン大学で開催された「サファヴィー朝時代のイランと世界学会」*Iran and the World in the Safavid Age Conference*では、世界各国からサファヴィー朝研究者が一同に集い、4日間にわたって50本の研究報告と討論がなされた。2003年7月には「第4回サファヴィー朝研究円卓会議」*The 4<sup>th</sup> International Round-Table on Safavid Studies*がバンベルグ大学(ドイツ)で行われ、43名が研究発表をした。
- 2) エスキャンダル・ベイグは、シャー・アッバース一世の宮廷において書記官 *monshi* 職を務めた。同書は、サファヴィー朝の繁栄が頂点に達したとされるアッバース一世の治世を流麗な文体で描き出し、同王朝期を代表するベルシア語年代記として知られている。三部構成の体裁をとっており、第一部ではサファヴィー家の始祖からアッバース一世の即位に至るまでの事跡が記され、第二部においてアッバース一世の即位から統治30年目にあたる1025-26/1616-17年までの出来事が扱われる。そして第三部では1629年のアッバース一世の死をもって本文が終了する。同時代の記述である第二部、第三部のみならず、第一部に含まれる情報の重要性も指摘されている(Savory 1978-86, vol. 1, intro: 24)。装飾語句を多用した文体の難解さとは裏腹に、その記述のスタイルは事跡を年代順に平明に記述したもので、全体としてあくまで冷静な語り口が特徴である。
- 3) RS: 17; Storey 1972: 884.
- 4) 羽田 1987: 63; Melville 2003: 67.

ィルは、この写本の由来、執筆の経緯や構成などについて詳細に記した論考を発表している (Melville 2003)。はじめに、写本発見の経緯と史料の概要について、同論文に基づき、簡便に紹介したい。

1997年、ケンブリッジ大学クライスト・カレッジ図書館で『世界を飾るアッパースの歴史』の古写本を調べていたメルヴィルは、それが失われたと考えられてきた『歴史の精華』第三巻であることに気がついた。実は、この写本 (Library of Christ's College, Cambridge, Ms.Dd.5.6) は、高名なイラン文献学者ブラウンが作成したケンブリッジ大学所蔵ペルシア語写本カタログにおいて、『世界を飾るアッパースの歴史』として誤って記載されていたのである<sup>5)</sup>。氏はいち早く、学会で写本の概要について報告した<sup>6)</sup>。

写本のサイズは、34.7cm (縦) × 20.7cm (横) であり、縁取りされた文字を記す欄内 (23cm × 11cm) に本文が記されている。良質のインド製の紙片は579葉を数える。すなわち、1,000ページを越す長大な作品である<sup>7)</sup>。作品中には推敲の途上と見られる箇所も多く、単線で消された記述や欄外の書き込みも多い。しかし、こうした加筆・修正は、AT III fol.420a 以降、事実上観察されず、小題が書き込まれる位置が空白のまま残されている場合も見られる。これらは、後で朱書きで入れるはずの部分が放置されたのであろう。また、人名の上には朱で線が引かれてい

るが、AT III fol.375b 以降、これも行われなくなる。興味深いことにこうした写本の特徴は、統治30年目と31年目の記述をほぼ境目 (AT III, fol.377a) として生じている。後述するが、これはエスキュンダル・ベイグの年代記との関連を示唆するものである。このように、写本は完成したものとは考えられない。一方で、修正された箇所も原文がほとんどが認識可能である。皮肉なことに、完成作品では削除された可能性もあるこうした記述が、史料の価値をいっそう高めている<sup>8)</sup>。

この第三巻の発見に伴い、これまで知られてきた第一巻、第二巻を含め、『歴史の精華』執筆過程についても、ある程度の推測が可能となった。第三巻の巻末には1045年ラビー第1月17日木曜日 (1635年8月31日〔金曜日]) の奥付が付されている。しかし、自筆本とされる第二巻の写本に1639年の奥付があり、第三巻自体も編集途上にあると考えられることから、ファズリーが長年にわたり加筆・修正を繰り返していたことが明らかである。メルヴィルは、アッパース一世の統治30年までの出来事を伝える第三巻の前半部分は、おそらく作品全体の中で最も早く記された部分の改訂版であり、後半部は第一巻と第二巻の執筆後に記されたと推測している<sup>9)</sup>。

『歴史の精華』第三巻の構成は稿末の表に掲げた通りである。本文はアッパース一世の即位と反逆したアミールの処刑に関する記述で始まるが、AT III fols.7a-20a には995年

- 5) Melville 2003: 63. 後代に差し替えられた冒頭部で『世界を飾るアッパースの歴史』の序文が引用され、18世紀にインドで写本が売買された時点ですでに『世界を飾るアッパースの歴史』の写本とされていたらしい (Melville 2003: 65, 67)。
- 6) Melville 1998; Melville 2003. 筆者は、2000年9月、この写本の現地調査を行った。写本と未発表論考 (当時) の利用便宜を図ってくださったメルヴィル博士とクライスト・カレッジ図書館司書各位に深く感謝したい。
- 7) なお、筆者の手にあるマイクロのフォリオ番号とメルヴィル博士が論文で用いている番号はAT III, fol.149b 以降異なる (メルヴィル氏の番号が一つ多い)。メルヴィル博士に問い合わせたが、解答を得ていない。現時点では確認できないが、近く予定されている CD-ROM による写本出版を待ちたい。
- 8) メルヴィル博士は称号などが消された箇所については、当該人物の失脚などが考えられると指摘している (Melville 2003: 70)。ただし、単純に文章の繰り返しを避けた箇所や、削除の理由が判然としない箇所も多い。
- 9) Melville 2003: 75.

シャバーン月7日（1587年7月13日）の即位から1038年ジュマダー第1月24日（1629年1月19日）の死去まで治世各年度ごとに要約が示されている。メルヴィルは冒頭部のインデックス *fehrest* を、ペルシア語年代記において極めて独特なものとして高く評価している<sup>10)</sup>。その後、各年度ごとに記述が続き、本文はシャー・サフィーの即位を受けて AT III fol.565a で終わるが、残りの14 フォリオ（AT III, fol.579a まで）にはアッバース一世在位時の高官の名前が列挙されている。

前述の通り、第三巻の写本は、アッバース一世の治世30年を区切りに編集上も分かれているが、これは、『世界を飾るアッバースの歴史』第二部、第三部と対応している。また、著者ファズリー自身がエスキャンダル・ベイグを直接知り、その年代記を参照しながら記述を進めていることについて本文中で度々触れている。例えば、ファズリーは、1017/1608-09年、ジャラーリー Jalāli 集団がオスマン朝から亡命して来朝した事件について詳しい記述を残している。この中で、宮廷の宰相ミールザー・ハーテム・ベイグ Mirzā Hātem Beyg がタブリーズで彼らをもてなした宴について、次のように記している。

「[高位の隠れ家] エスキャンダル・ベイグ書記官も、また、陛下の命令により [状況を記すために] 同席して、アースフ Āsaf の如きお方 (=ハーテム・ベイグ) のヴァズィールであるハージェ・シヤハブ・ウッディーン・ケルマーニー Khwāje Shahāb al-Dīn Kermānī とともに [宴席においてペンのインク壺を持って] 立ち、その模様 *khaqāyeq* を記していた。宴席は書き表せないほどに飾られた。著者の兄弟モハンマド・ベイグ

Mohammad Beyg もまた、この会合に加わっており、支出の管理を任されていた。おそらく、一部について情報を持っていなかったエスキャンダル・ベイグよりも、彼がよりよく記したかもしれない (AT III, fol.236a. なお、単線で消去されている箇所は [ ] で括って記した)」

このエスキャンダル・ベイグの経歴についてもファズリーは触れている（ただし、この箇所は全体が単線で消されている）。それによると、エスキャンダル・ベイグは、シャー・タフマースプ期にアゼルバイジャン州のヴァズィール職を務めたミールザー・アター・アッラー・フーザーニー Mirzā Atā Allāh Khūzānī（アッバース一世が即位して間もない時期の宮廷の宰相シャー・ヴァリー Shah Valī の祖父<sup>11)</sup>）の *gholām* であった。ファズリー自身、同族フーザーニー出身のアター・アッラーとの親族関係から、極めて近い関係 *nesbat-e ekhlāsi* にあったとする<sup>12)</sup>。ファズリーは1025-26/1616-17年、ギャンジャ近郊ダーネギー Dāneqi 野営地でアッバース一世の治世から記述を始めたとしており、宮廷書記官として当時から高名なエスキャンダル・ベイグの作品を意識して執筆したことが想定される<sup>13)</sup>。もっとも、ファズリーの年代記は叙述のスタイルや情報の質量において、『世界を飾るアッバースの歴史』と大きく異なっている。これが意図的であったかどうかは判断し難いが、双方の記述を比較することで、アッバース一世期の国家変革の様相がより具体的に我々の前に立ち上がってくるのである。

この他、形式的な側面から注目される点として、アッバース一世の治世後半に関する記述の充実ぶりが挙げられる。エスキャンダ

10) Melville 2003: 77.

11) フーザーニー家の系図については、羽田 1987 を参照のこと。

12) AT III, fols.136a-b; Melville 2003: 86-87.

13) Melville 2003: 72.

ル・ベイグの年代記は治世前半の30年を記した第二部と残りの12年を記す第三部が校訂本の分量で約3:1(536頁と164頁、一年当たり約18頁が約14頁に減少する)であるのに対し、ファズリーは対照的に満遍なく記している(写本の比率で2:1, 714頁と377頁、一年当たり24頁から逆に31頁に分量が増加する)<sup>14)</sup>。アッパース一世の治世後半には、カンダハール征服(対ムガル朝, 1622年)、バグダード征服(対オスマン朝, 1625年)など、重要な対外戦争が続いたので、情報の欠を補う意義は極めて大きい<sup>15)</sup>。

### III 記述内容の特徴：『世界を飾るアッパースの歴史』との比較を通して

この新史料に関して、前に述べたように、発見者であるメルヴィルによる詳細な紹介が存在する。その中では、記述内容の特徴についても検討されているので、本節の狙いについて、ここで触れる必要があるだろう。

メルヴィルは、ファズリーの年代記の特徴として、公文書を多く記載している点(Melville 2003: 79)、地方役人や名士について情報が多い点(Melville 2003: 80)について触れ、「ファズリーが述べている様々な都市における多くの任命は、他の同時代史料では全く触れられていない。したがって、地方と地域行政をより深く知ることが出来る」(Melville 2003: 82)と述べている。

また、「ファズリーは、彼が育ったグルジアにおける出来事との関連において、とりわけ、グルジア・カヘティの知事に6年間あったPaykar Khan Igrimi Durtのヴァズビールであった1025-34/1616-25年の間に、頻繁に自らについても言及している。」(Melville 2003: 89)とする。

さらに、結論で「彼の年代記に関する予備

的な考察により、もっとも価値ある独自の貢献は、地方行政や、官職の任免、パトロネージュのネットワークとサファヴィー朝統治システムにおける影響への我々の理解である。(Melville 2003: 90-91)」と、この作品の特徴についてまとめている。

筆者も、詳細 minor details (Melville 2003, p.82) にこだわる記述の数々を、この年代記最大の特徴とすることに、異論はない。ただし、残念ながら、こうした史料の特性について、前述の論考の中では十分に例示がなされていない。

メルヴィルは、この作品の特色を紹介するために、次の4つのエピソードを取り上げている。

1. シャー・アッパースの南イラン遠征 Shah 'Abbas's intervention in southern Iran (Melville 2003: 80-83)
2. ノグタヴィーの弾圧 Suppression of the Nuqtavis (Melville 2003: 83-84)
3. サールー・タギーの経歴 The career of Saru Taqi (Melville 2003: 85)
4. 自伝的記述 Autobiographical information (Melville 2003: 86-90)

この4つのエピソードのうち、自伝的記述を除いた3箇所は、メルヴィル自身が述べているように、近年サファヴィー朝研究の中で注目された事件や人物に関する記述である。ここでは、ファズリーの情報の独自性は実証されているものの、その記述の傾向については、あくまで断片的な指摘に留まっている。

氏が、史料の最大の特徴と結論付けるパトロン・クライアント関係に関する記述や、地方行政に関する記述、コーカサス情報も、ファズリー個人の履歴に関する情報の紹介部分を除くと、例証に乏しく(引用のフォリオ番号が丁寧に記されている点を差し引いても)十全とは言いがたい。そして、後で指摘する

14) 計算に当たっては、冒頭部やインデックス、最後の高官一覧の箇所を省いた。

15) これは、ファズリー自身が一時的に失職した1625年のグルジア大反乱が詳述されるなど、著者の個人的背景も一因として考えられる。

ように、ファズリーの記述の特徴は、単に詳細さに留まるものではないのである。

本節では、情報そのものの独自性より、作品の傾向をより明確に示していると考えられる部分を取り上げる。便宜的に大きく4つのトピックに分類して、具体的に史料の記述を引用して、エスキャンダル・ベグの年代記など他史料の記述とも比較することで、考証を厚くしながら、より体系的な理解を試みたい。こうした作業を通じて、ファズリーの年代記の特徴がより明確になると考えられる。

### 1 家族関係に関する記述

ファズリーの年代記には、親族や婚姻関係など高官の家族的紐帯に関して、詳しい記述がみられる。これは、官選の正史という性格が濃厚な『世界を飾るアッパースの歴史』と大きく異なっている。以下に具体例をいくつか挙げてみよう。

アッパース一世の治世初期、カスピ海岸のターレシュ *Tālesh* 人を統べるアミール・ハムゼ *Amīr Ḥamze* は、アッパース一世に服従せず、オスマン朝に奔った。しかし、サファヴィー家に対するターレシュ人の貢献を考慮したアッパース一世は、ハムゼの息子たちに恩恵を施している。

「バーヤンドル・ハーン *Bāyandor Khān* の名で知られるミールザー・ハーン *Mirzā Khān* を百人長 *yūzbāshī* として、数年後、世襲の土地の支配を任せ、ホセイン・ハーン・シャームルー *Hoseyn Khān Shāmlū* の婿の榮譽を与えた。サールー・ハーン *Sārū Khān* をシェイハーヴァンド *Sheykhāvand* 集団のアラシュルー *Arashlū* のコルチの栄光ある部隊の百人長とし、バーヤンドル・ハーンの死後、ホセイン・ハーンの別の娘をサールー・ハーンに与え、ハーンの位を授けた。ミールザー・スルタン

*Mirzā Solṭān* とアリー・ハーン *‘Ali Khān* は狩猟官 *mīrshekār* に列せられ、天国で休息されている上様が神の恩寵のもとに達した年には、アリー・ハーンはギーラーン *Gilān* のラシュト *Rasht* のダールーグ *dārūghe* であった。このように（アミール・ハムゼ）ハーンの子息たちは皆、榮譽を見出した。（AT III, fol. 52b）」

ファズリーによれば、ホセイン・ハーン・シャームルーはアミール・ハムゼの説得に赴き、子供達を引き取り、宮廷にもたらした人物であった。したがって、ホセイン・ハーンがいわば後見人的立場にあったことが、こうした記述から伺われる。エスキャンダル・ベイグも、アミール・ハムゼがオスマン朝に寝返った経緯については詳細に記している。また、ホセイン・ハーンが、紫に籠ったアミール・ハムゼの求めに応じて開城の責任者を務めたことも伝えている。しかし、彼の息子たちに関しては、アッパース一世が死去した時、アースタラーの統治者としてサールー・ハーンが言及されているに過ぎない（TAA: 441-443, 1086）。エスキャンダル・ベイグは、ホセイン・ハーン・シャームルーとのその後の婚姻関係について一言も触れていない<sup>16)</sup>。

キズィルバシの名族シャームルー部 *Beygdeli* 族のモハンマド *Moḥammad* とその兄弟は、アッパース一世からシャー・サフィー治世初期に活躍したが、彼らの経歴についても、次のように記している。

「上様もまた、カラバフで冬営され、アゼルバイジャン地方でもっとも素晴らしいその地域で狩猟に興じた。アッラーヴェルディー・ハーン *Allāhverdi Khān* やコルチ軍長官 *qūrchibāshī* のアッラーゴリー・ベイグ *Allāhqolī Beyg*、ナド

16) ファズリーは、この他にも、サールー・ハーンとコルチ軍長官イーサー・ハーン *‘Isā Khān* との姻戚関係についても触れている（AT III, fol.494b）。

ウル・ハーン Nadr Khān や近習達、とりわけ、モハンマド・ベイグ・ベイグデリーがお傍に仕えた。モハンマド・ベイグは、その頃、自らは王権の柱石となり、兄弟であるグールガーン Gūrgān 知事のサールー・スルタン Sārū Solṭān, 上様の神聖なるハラムの侍従 *ishikāqāsi* であるヘイダル・スルタン Heydar Solṭān, 大砲隊長 *sarkār-e tūp* で、ウルミエ城砦での働きにより、この頃、城の占領の後、ハーンの称号を得て、その地域の統治に勤しんでいたガパーン・ベイグ Qapān Beyg や式部長官 *tūshmālbāshī* のゼイナル・ベイグ Zeynal Beyg は、世界の王者の恩寵に預かっていた。皆、かつてホセイン・ハーン・シャームルーの従者であり、前述のように僕に列せられ、側近として信頼されていたのである。(AT III, fol.257b)』

エスキヤンダル・ベイグも、この兄弟達がシャーの側近としてウルミエ攻略で果たした役割を伝え、また、モハンマド・ベイグが死に際して息子が無く、ヘイダル・スルタンに遺産が継承された点など、ファズリーの記していない記述も残している。しかし、初出する治世 11 年目の時点でモハンマド・ベイグはすでにシャーのもとに仕えており、ホセイン・ハーンとの関係については触れていない (TAA: 535, 807-811, 820)<sup>17)</sup>。

以上のような親族的なまとまりに関する記述からは、当時の政治エリートのリクルートシステム的一端も明るみに出る。注目されるのは、アッバース一世の「引き抜き」である。アッバース一世期以降台頭したゴラーム集団

においても、兄弟が皆登用される例は頻繁にあるが、これらは、アッバース一世が認めた一家を丸ごと召抱えるという当時の政治文化が反映されていると考えられる<sup>18)</sup>。1024/1615-16 年、モハンマド・ベイグもかつて仕えたヘラート総督ホセイン・ハーンに対して、宮廷の僕 *bandegān-e khāṣṣe* に列するためにシャームルー部の有望な若者 12 人を宮廷に送るよう命じたとファズリーは述べている。(AT III, fol.352a)。これは当時の政治習慣を如実に反映していた。すなわち、家族関係が政治エリートの根本にあり、また、アッバース一世自身も、様々な社会集団の中から特定エリート家系を創出して優遇しながら、そのバランスの維持に腐心していたと考えられるのである。

このように、ファズリーは親族関係を中心とするコネクションについて、躊躇せずに記している。とりわけ、注目できることは、母方の親類関係に関する記述である。例えば、アッバース一世の治世 23 年目 (1018/1609-10 年) にマルヴ Marv の支配を委ねられていたベクターシュ・ハーン Bektāsh Khān が死亡した際には、『世界を飾るアッバースの歴史』では、その政治経歴が細かく記されている (TAA: 804)。一方、ファズリーは次のように記している。

「その後、ベクターシュ・ハーンの息子達が御前に達し、コルチ軍長官とベクターシュ・ハーンに育てられた百人長イーサー・ハーン・ベイグ Īsā Khān Beyg の仲介により、拜謁の榮譽を得た。モヘブ・アリー・ベイグ Moḥeb ‘Alī Beyg の母親はハーン・ジュージャーズ・ベイグ・ガージャール Khān Jūqāz Beyg

17) ファズリーは 1006/1597-98 年に関する記事でも、「かつてハサン・ハーン・シャームルー Hasan Khān Shāmlū の従者であり、兄弟のヘイダル・スルタン、サールー・スルタン、ガパーン・ハーン、ゼイナル・ハーンとともに、(シャー・アッバース一世が) 前述のハーンから獲得して従者となり、王権の柱石の称号を得ていたモハンマド・ベイグ・ベイグデリーをラーリージャン開城の担当者として送ることを決定した」(AT III, fol.105a) と同様の内容を述べている。こうした繰り返しもファズリーの年代記には良く見られる。

18) 前田 1999; Maeda 2003.



Qājārの姉妹であり、コルチ軍長官はガージャール部との関係から<sup>19)</sup>、彼に他の息子達より目をかけたため、[たとえ年齢が8歳で兄弟や兄弟の子供達が彼より年長であっても、モヘブ・アリー・ベイグの知性と力は子供ながらも上様の気に入られ]彼をオスタージュルー Ostājlu のコルチの百人長として、ハーンの従者の一軍をコルチとした。長兄キャルブ・アリー・ベイグ Kalb ‘Ali Beyg もまた、コルチに列し、彼の配下としたが、俸給は百人長と同じとした。ベクターシュ・スルタンの息子達 [ゾルファガール・アリー・ベイグ Zū al-Faqār ‘Ali Beyg とユーソフ・アリー・ベイグ Yūsof ‘Ali Beyg を偉大なるアーガーに列して、大いに恩恵に与らせて] と (?) ガンバル・アリー・ベイグ Qanbar ‘Ali Beyg とビーラーム・アリー・ベイグ Bīlām ‘Ali Beyg もまたアーガーに列して、それぞれに応じて好意に預からせた (AT III, fol.249a)。

ここでは、単に兄弟の経歴を書き連ねるだけでなく、母親の違いにより、待遇が異なるとする事例が取り上げられている。もちろん、ファズリーの情報を全て事実として受け入れるには慎重でなければならない。常に他史料も参照して事実確認を心がける必要がある。ただし、エスキャンダル・ベイグも、モヘブ・アリー・スルタンがアッバース一世の死去時にホラーサーンのネサー Nesā を統治していたことを伝えている (TAA: 1085)。パトロン・クライアント関係の核心にある親族関係を具体的に語るファズリーの年代記は、当時のサファヴィー朝国家体制における権力構造を解き明かす上で、貴重な情報を提供する。さらに、ファズリーの個人的経歴や血族に関する強い関心は、王家に対しても発

揮されており、こうした記述はとりわけ注目できる。

## 2 王族に関する記述

サファヴィー朝イラン史研究の碩学ファルサフィー N. Falsafi が、ペルシア語ならびに欧文史料を駆使して、シャー・アッバース一世に関する情報を纏め上げた著作が『シャー・アッバース一世の生涯』*Zendegāni-ye Shāh ‘Abbās-e Avoal* である。この大著の中で、アッバース一世の私生活に関する記述を参照すると、そのほとんどが西欧人旅行者の記録に頼っている事実が驚かされる。晩年、自身の後継者のほとんどを処刑あるいは盲刑に処したアッバース一世の家族関係について、エスキャンダル・ベイグの筆が鈍ったであろうことは想像に難くない。ファズリーの記述も、体系的なものとは決して言いがたいが、王子の誕生や後宮に関する記述など、多くの情報を補うことが出来る。

アッバース一世期において王室内で発生した最大の出来事は、長子で後継者と目されていたモハンマド・バークル (サフィー) Moḥammad Bāqer (Şafi) 王子が、1024/1615年に殺害された事件であろう。エスキャンダル・ベイグは、この事件の記述を忌避している感がある。彼によれば、太子の叛意を告げる側近の言葉に、アッバース一世は最後まで耳を傾けなかったが、チェルケス系ゴラームが単独で犯行に及んだとしている (TAA: 883-884)。一方、ファズリーによれば、王子の行状に不信感を持ったシャーは殺害を決意し、はじめにガルチャギーイー・ベイグ Qarchaqāi Beyg、ついでミールザー・ハーソン・ターレシュに白羽の矢を立て、実行を命じたが断られたとする。最終的に請け負ったのがチェルケス系のゴラーム、ベフブード Behbūd であった (AT III, fols.338a-b)。

たしかに、ファズリーの記述はエスキャン

19) 当時のコルチ軍長官はガージャール部出身のアッラーゴリー Allāhqoli であった。

ダル・ベイグのそれに比べるとあまりに叙述的である。もっとも、ファズリー、エスキヤンダル・ベイグ共に実行役をベフブードとし、その理由を太子との近さゆえにシャーの寵を失っていたチェルケス系ゴラームの名誉回復であったとしており、この点では一致している。ベフブードが太子暗殺後もアッパース一世に仕えて地方総督などを歴任したことはエスキヤンダル・ベイグも伝えており、アッパース一世が命じたとするファズリーの記述はより説得力がある。そして、ミールザー・ベイグも側近との相談の上でベフブードに命じたと記している (RŞ: 850-52)<sup>20)</sup>。このように、アッパース一世治世最大の出来事における、「正史」エスキヤンダル・ベイグとファズリーの記述の鮮やかな対比は、その史料的价值を雄弁に物語っている<sup>21)</sup>。

また、常に関連する人物情報を事細かに伝えるファズリーの作品の特徴は、第三子と考えられているモハンマド王子を盲刑に処した際の処置からも読み取ることが出来る。

「この年 (1029/1620-21 年)、上様の御心は子息で王朝の後継者であるスルタン・モハンマド王子 *Soltān Mirzā Moḥammad* の行状のため安らぐことがなかった。(中略) 世界を見る目を削り貫くことを望み、モスタファー *Moṣṭafā* 王子の娘で、ゾルファガール・ハーン

*Zū al-Faqār Khān* が 1026 年巳年に殺害された後、彼と結婚していた正妻サーレヘ・スルタン・ベイゴム *Şāleḥe Soltān Beygom* とともに、天国の徴マーザンダラーンから王都エスファハーンに送り、毎年 1560 トマンの年金をアーサフ・ミール・モイーン *Āṣaf Mir Mo'in* に決済することとした<sup>22)</sup>。(中略) 上様の叔父であるスルタン・アリー *Soltān 'Ali* 王子やその息子スルタン・モスタファー *Soltān Moṣṭafā* 王子、上様の兄弟であるアブー・ターレブ *Abū Ṭāleb* 王子やタフマースブ *Ṭahmāsp* 王子が前述の都に滞在したため、シャイフ・アフマド・アーガー *Shaykh Aḥmad Āqā* の邸宅を改築して、視力を奪われた王子達はそこで生活するように定められた。かつてアリーゴリー・ハーン *'Aliqoli Khān* の従者で、宮廷の侍従に列せられており、*tasme qarn?* の名で知られるアリー・ベイグ・シャームルー *'Ali Beyg Shāmlū* が王子たちの師父に任じられ、陛下の御心は安らぎを得た (AT III, fols.415a-b)。」

このように、単に王子を盲刑に処したことを記すだけでなく、一連の処置や、他の王子の動向についても情報を伝えている。アッパース一世即位前後に、王位継承のライバルで

- 20) 後で触れるガルチャガーイーのオスマン朝への出奔事件など、ファズリーとミールザー・ベイグの作品には (エスキヤンダル・ベイグが記していない事件において) 似通った記述が見られる。執筆年代から考えれば、ミールザー・ベイグの年代記をファズリーが引用した可能性も否定は出来ないが、世間で俎上にのぼっていた話を別個に書き留めたとも考えられる。しかし、いずれにせよ、暗殺を依頼された人物としてゴラームだけではなく、ターレシュのアミールでシャームルーの婿であった人物に言及する点も含めて、その語り口は大きく異なる。
- 21) ちなみに、ファズリーは、縁深かったキズィルバシュ・アミールが太子周辺に仕えていたためにシャーの寵を回復できなかった事例を具体的に紹介するなど、(説話的記述ではなく) あくまで歴史叙述のスタイルを崩さずに事件について詳述している。なお、ファズリーは続けて、「この出来事の後、故王子の遺児である当時 4 歳のソレイマーン *Soleymān* 王子と 2 歳のサム *Sām* 王子 (後のシャー・サフィー) を、彼らの母親で正妻であるエスマーイール *Esmā'il* 王子の娘ファフル・ジャハーン・ベイゴム *Fakhr Jahān Beygom* は、エスファハーンへ連れて行き、養育するように定められた (AT III, fol. 339a)」と記しているが、ファルサフィーはサム王子の母親をチェルケス系としている (Falsafi 1371: 541)。
- 22) なお、ファズリーは、この女性が前夫との間にバイラム・ベイグ *Bayrām Beyg* と一人の娘をもうけていたことも伝えている (AT III, fol.260b)。

あったアブー・ターレブ王子やタフマースプ王子について、エスキャンダル・ベイグはアッパース一世の即位後はほとんど触れていない<sup>23)</sup>。

キズィルパーシュ・アミールの母方の親族関係について前に触れたが、エスキャンダル・ベイグと比べて、女性に関する記述が多い点が、この史料の特徴の一つに挙げられる。後宮を統べていたアッパース一世の叔母ザイナブ・ベイゴム Zaynab Beygom についても、ファズリーはより多くの情報を伝えている。カーシャーン Kāshān が彼女に与えられていたことは他の史料からも知られるが、ヴァズィールとダールーガの任命を具体的に伝えているほか (AT III, fol.61b)、ヤズドのゾロアスター教徒のジズヤに関する記事やシャーとの対立と和解<sup>24)</sup> など、興味深い記事が多く見られる (AT III, fols.135b, 222b, 224a, 245b, 248a)<sup>25)</sup>。

サファヴィー朝の王女が、ヴァーリー *vālī* と呼ばれた世襲の境域君主に与えられた例は、よく知られている。例えば、アッパース一世の治世初期、反乱を起こしていたロルの統治者シャーヴェルディー Shāhverdi が一旦帰順した際には、彼らが預言者の一族に連なり、遠い親戚に当たるとして赦し、アッパース自らその姉妹を娶る一方、バーゲル・ザマーン Bāqer Zamān 王子の娘を与えた (AT III, fol.53b)。同時期、中央集権化の中で焦点の一つとなったギーラーン制圧では、タフマースプ期以来のサファヴィー家と君主の婚姻が一つの焦点となった。

また、アラベスターンの統治者セイエド・モバーレク Seyyed Mobārek の息子ナーセル Nāser には自らの娘シャー・ベイゴム Shāh Beygom を降嫁し、モバーレクの息子が死去した際にはナーセルを帰郷させた (AT III, fols.245b, 247a, 311a, 324b, 404a)。また、後でも触れるが、コーカサスに関しては、グルジアのシモン二世に、アッパース一世の娘とコルチ軍長官イーサー・ハーンとの間に生まれたジャハーン・バーヌー・ベイゴム Jahān Bānū Beygom を降嫁した出来事が特に詳細に記されている。

もっとも、内政を考慮すれば、こうした諸君侯への腰入れと並んで政治的に大きな意味を持ったのは、臣下であるアミールへの王女降嫁であった。例えば、アッパース一世の師父でその即位直後に権勢を振るったモルシェドゴリー・ハーン・オスタージュルー Morshedqolī Khān に関して、ファズリーは次のような興味深い記述を伝えている。

「モルシェドゴリー・ハーンは故スルタン・ヘイダル王子 Soltān Heydar Mirzā の娘と結婚することを目論んだ。神の影であらせられる陛下も許可を与えたが、故王子の後宮にいた娘の母親はこの婚姻に許可を与えなかった。陛下は許しを得るためにたびたび大叔母の家に赴いたが、この自尊心の強い女性はモルシェドゴリー・ハーンを婿とすることに同意しなかった。」「マフムード・ハーン Maḥmūd Khān はモルシェドゴリー・ハーンに次のような意味のことを告げ

23) ファルサフィーはアラムートに送られたとしている (Falsafi 1371: 548)。なお、上に引用したファズリーの記事と同じ年 (アッパース一世の治世 34 年目) に、アブー・ターレブ王子がアラムートで病死したことをエスキャンダル・ベイグが伝えている (TAA: 955)。事実の確定には、他史料とのより詳細な照合が必要であろう。

24) 「グルジアへ向かった時から会うことがなかったザイナブ・ベイゴムの元へ赴き (AT III, fol.540b)」と記している。

25) ザイナブの母方の甥の活動が記されている。「上様の敬愛する叔母ザイナブ・ベイゴムの母方の叔父の子 *pesar-e khālū* である、ゴラームのダルー・ダルヴィーシュ Dalū Darvish にナフジェヴァーン Nakhjevān に赴き、住民を移動させ、渡河させるように命じた。(AT III, fol. 352b)」ザイナブはシャー・タフマースプとグルジア系の母親から生まれたとされるが、従兄弟がゴラームとして活動したという記録は管見の限り他史料には見られない。Cf. Szuppe 1995: 100–102.

た。神の影であらせられる陛下のあなたに対する感情が損なわれているならば、王 *pādshāh* の名をスルタン・ハムゼ王子 Solṭān Ḥamze Mirzā の息子エスマーイール王子 Esmā'il Mirzā に委ね、グルジア人 Gorjī のクースタンディール王子 Kūstandil Mirzā の姉妹である彼の母親と結婚してはどうか (AT III, fol.24b)』

モルシェドゴリーが王族との婚姻を希望した点について、エスキャンダル・ベイグは全く触れていない。さらに、ハムゼ王子がグルジア・カルトリ王シモン一世とグルジア・カヘティ王アレクサンドレ二世の娘を娶っていたことは知られているが、具体的に王子を儲けていたことは、この史料のみが伝える独自の情報である<sup>26)</sup>。また、王族女性の強い発言力を伝えるこの記述は、それ自体がたいへん興味深い。

このモルシェドゴリーの処刑を命じることで、アッパース一世は支配者としての権威を大いに高めた。実際、暗殺実行者たちは皆、出世の糸口を掴んでいる。その中でも、とりわけ、ホラーサーン時代からの股肱の臣であるハサン・ベイグ・チャーヴォシュルー Ḥasan Beyg Chāvoshlū には重要州ハマダーン Hamadān を与えている。さらに、ヘイダル王子の婿とした (AT III, fol.25b35b-36a)<sup>27)</sup>。

また、モルシェドゴリーを処刑後、キズィルバーシュの大立者として君臨したファルハード・ハーン Farhād Khān の弟ゾルファガール・ハーンに、アルダビール Ardabil にモガーナト Moghānāt とゲゼルアーガージュ Qezelāqāj を併せて与え、モスタファー

王子の娘と結婚させた。この時、ファルハードが準備を請け負って、ガズヴィーンで盛大な祝宴が催されている (AT III, fol.49a)。エスキャンダル・ベイグは前任者マフディーゴリー Mahdiqolī の処刑についてはより詳細に触れているが、ゾルファガール・ハーンの任命と婚姻については沈黙している<sup>28)</sup>。これは、ファルハードとゾルファガールの兄弟が、後にそれぞれ処刑されたことに関連している可能性もあるが、そもそも、エスキャンダル・ベイグは政治的事件のみを記す傾向がある。ファズリーは、各年度の動きの中できちんところした点について記しているので、アッパースの政治的意図について、より詳しく把握することが可能となるのである<sup>29)</sup>。

### 3 行政・外交に関する記述

ファズリーはその生涯の大部分を地方官僚として過ごしており<sup>30)</sup>、メルヴィルも指摘するように、地方行政や官職の任免に関して詳細な記述を残している。とりわけ、任地として過ごした北西イラン・コーカサスについて詳しい。例えば、シールヴァーン Shirvān の再征服直後の記述を見てみよう。

「総督 *beyglarbeygī* (=オスマン朝の司令官) のトユールであったシャマーヒー Shamākhi とその周辺の軍勢の指揮権をゾルファガール・ハーン・ガラーマンルー Qarāmānlū に授けた。サールー・ハージェ Sārū Khwāje の叔父であるハージェ・スルタン・ハサン・ガズヴィーニー Khwāje Solṭān Ḥasan Qazvini をヴァズィールに昇格させ、ハージェ・モハンマド・レザー Khwāje Moḥammad

26) Maeda 2001: 163.

27) エスキャンダル・ベイグも、ハサン・ハーンの死亡記事の中でヘイダル王子の娘と結婚し、晩年をサーヴェにある彼女の私有地で過ごしていたことを記している (TAA: 1042)。しかし、結婚の時期については明らかにしていない。

28) TAA: 439-440, 442 ですでにアゼルバイジャン総督としてゾルファガール・ハーンが登場する。

29) ちなみに、TA にも、女性を含めた王族の動向について比較的詳しい記述が見られる。

30) 親族や兄弟は中央宮廷の役職を歴任している。

Rezā を宮廷の従者として、アゼルバイジャン地方のすべての羊頭税 *chūpānbeygī* を委ねた。サファヴィー家の神聖な敷居の管財人職は、ゾルファガール・ハーンを通して、アブダール・ベイグ・ターレシュ Abdāl Beyg Tālesh—シェイフ・ザーヘド・ギーラーニー Sheykh Zāhed Gilāni の子孫を自認し、ヘラート Herāt 遠征において恩寵を受け、この頃、兄弟のシェイフ・シャリーフ・ベイグ Sheykh Sharīf Beyg や甥のチェラーグ・ベイグ Cherāgh Beyg と共に宮廷のコルチに列せられた一に委ね、教導の街アルダビールを王領地としてダールーゲ職を管財人アブダール・ベイグの責務とし、ハーレセ地の歳入を常勝軍のトユールとした。サラブ Sarāb をシャー・ナザル・スルタン・バーパルダール Shāh Nazār Solṭān Bāpardalū のトユールに、オンクート Onkūt をマンスール・スルタン・チャムシュガザーグ Manṣūr Solṭān Chamshqazāq に授けた。ゾルファガール・ハーンのとユールであったムガン王領地にして、歳入をキャラクタータル *kalāntar* のチューパーン・ベイグ Chūpān Beyg におわせた。八万家屋のダールーゲ職をマンスール・ハーン・ベイグ・シャームルー Manṣūr Khān Beyg に授けた。ファルハード・ハーンの本拠地であったゲゼルアーガージュをランギャル・コナーン Langar Konān とともにゾルファガール・ハーンのとユールとして、セフィード・ダシュト Sefid Dasht とオウジュルード Oujrūd? をかつてファルハード・ハーンのとユール *vakīl* であり、その頃、ターレシュのコルチの百人長に任じられていたヤードガール・アリー・ベグ・ターレシュ Yādgar ‘Alī に与えた。アースターラー Āstārā は、ファルハード・ハーンのとユール近臣であったアヒー・スルタン・チ

ャーキャルルー Akhī Solṭān Chākīrlū のトユールとして、スルタンの列に編入した。アンハール Anhār とマザーレ・モガーナート Mazār‘e Moghānāt をセイエディー・スルタン・ハブーシュルー Seyyedī Solṭān Khabūshlū? に与え、アゼルバイジャンに存在したゾルファガール・ハーンのとユール地はこのように分割された。そして門の中の門 (=ダルバンド Darband) の統治権をチェラーグ・スルタン・ゲラーンパー・オスタージュールー Cherāgh Solṭān Gelānpā に授け、小銃軍の百人長シャーナザル・ベイグ・タヴァッコリー Shāh Nazār Beyg Tavakkoli を「宮廷に仕えるよう定められていた」ルームルー Rūmlū とバヤート Bayāt の一団と共にダルバンド城砦防御の任にあたらせた。彼らの俸給にはハージェ・モハンマド・レザーの責務としてアゼルバイジャンの羊頭税から割り当て、毎年城砦に送られるように定められた。パークー Bādkūbe 地方はガンジャ城でアフマド・パシャによって殺害されたロスタム・スルタン・ソグルン Rostam Solṭān Soghlun の息子オンマト・スルタン Ommat に油田三箇所と共に与えられた。毎年 800 トマンの収入になるハルギー Khargī 油田をハーッセとして定めた。(AT III, fols.218b–219b)」

このように、単にゾルファガールがシールヴァーン総督に任命されたことを伝えるだけではなく、彼の前任地であるアルダビールの権益や、シールヴァーンに連なる諸地域の統治権にまで、詳細に記している。さらに、注目されるのは、税額について具体的に述べている点であろう。税収を徴収する側、受け取る側など、配分の流れにも言及しており、引用した部分からも垣間見れるように、地方行政官らしい記述である。より詳細な研究が必要であるが、この史料の発見によって、サフ

ァヴィー朝行政についての知見が大いに増すことは疑いがない。

実際、エスキャンダル・ベイグは、統治権を担った有力アミールの任免に注意を払い、首都エスファハーンのダールーゲについてすら、ほとんど触れていない。したがって、彼の記述からは、王領地化など集権策が進んだアッパースー一世期における改革の正確な姿を見ることは難しい。その点、王領地のダールーゲやキャランタルについても触れるなど、地域に密着した細かい記述を心がけており、人物に関する情報も豊富であるので、より詳細な把握を可能とする。

ファズリーは、王朝の外交政策に関しても、豊富な記述を残している。それは、彼の親族の経歴とも無関係ではないだろう。叔父ミールザー・ベイグ *Mirzā Beyg* は、オスマン朝領と接し、実際に使節として派遣されたイエ

レヴァン総督シャーゴリー・ハーン・オスタージュルー *Shāhqoli Khān* のヴァズィール職を務めていた。ファズリーの父も、アッパースー一世治世初期、オスマン朝に人質として送られたヘイダル王子に同行している。ファズリーはこの使節団に関して、現在も父の手による旅行記が残っていると記し、自身も比較的詳しく触れている (AT III, fol.25a)。同様に、ゾルファガール・ハーンがオスマン朝への使節として派遣された際には、贈答品の準備の模様などについても詳述している (AT III, fol.88a-93a)。

こうした長所が発揮されているのは、インド関係の記述である。これは、彼自身が晩年をムガル朝宮廷で過ごしたことと無縁ではないと考えられる。本文中に写し *naql* の語を用いて引用されている文書は、管見の限り次のとおりである。

1615-16年	ティムール朝の結晶 <i>kholāse-ye dūdman-e gūrgānī</i> ジャハーンギール <i>Jahāngīr</i> 王宛で、燭台持ち <i>mash'aldār</i> のモハンマド・レザー・ベイグ <i>Mohammad Rezā Beyg</i> が携えた上様の親書の写し (AT III, fols.341a-342a) <sup>31)</sup>
1616-17年	セイイエド・ハサン・モサーエド・タブリーズィー <i>Seyyed Hasan Tabrizī</i> がジャハーンギール王宛てに携えた書記官エスキャンダル・ベイグの起草になる上様の親書の写し (AT III, fols.374a-375b) <sup>32)</sup>
1618-19年	栄光 <i>shobhānī</i> の影なる陛下宛ての婿 <i>gūrgānī</i> ジャハーンギール王の親書の写し (AT III, fols.395a-396b) <sup>33)</sup>
1618-19年	ジャハーンギール王宛てに記され、アーガー・ベイグ <i>Āqā Beyg</i> が携えた、天空の従者であらせられる上様の親書の写し (AT III, fols.397b-399b)
1618-19年	ジャハーンギール王からインドの野生動物を求めることに関して、燭台持ちのモハンマド・レザー・ベイグ宛てに発令された栄光の陰なる上様の運命が従うところの命令書の写し (AT III, fol.403a)
1619-20年	ヌール・ウッディーン・ジャハーンギール王宛てで、ゼイナル・ベイグ・シャームルーが携えた上様の親書の写し (AT III, fols.406a-407b) <sup>34)</sup>
1622-23年	(題名は空白) カンダハール征服に関するアッパースー一世の親書の写し (AT III, fols.438a-439a) <sup>35)</sup>
1622-23年	カンダハール占領後、ジャハーンギール王が上様に宛てて記し、ゼイナル・ベイグが携えた親書の写し (AT III, fols.440a-441b) <sup>36)</sup>

31) *Navā'ī* 1367, vol. 3: 307-308; *Islam* 1970: 76-77.

32) *Navā'ī* 1367, vol. 3: 308, 411-413; *Islam* 1970: 77.

33) *Navā'ī* 1367, vol. 3: 305-308, 407-410.

34) *Navā'ī* 1367, vol. 3: 308-309, 414-416; *Islam* 1970: 78.

35) *Navā'ī* 1367, vol. 3: 309-310, 418-20; *Islam* 1970: 83. Cf. 近藤 2000: 95-98.

36) *Navā'ī* 1367, vol. 3: 310-313, 421-423; *Islam* 1970: 83-84. AT III, fols.451a-452b で「ジャハ

1625-26年	ジャハーンギール王への上様の手紙 raq'c (AT III, fol.491a)
1627-28年	(題名は空白) ジャハーンギールからの親書 (AT III, fols.544b-545b) <sup>37)</sup>

親書以外にも、使節に対するアッバース一世の命令書も含まれている。また、AT III fol.429aからはゼイナル・ベイグを大使としてインドに派遣した際のやり取りが克明に記録されている。この間、サファヴィー朝は、ムガル朝からカンダハールを奪取し、厳しい外交交渉となったゼイナルの使節は他の史料でも良く知られている。しかし、メルヴィルが指摘するように、ファズリーは直接ゼイナルと深い関係を有していただけにその記述は貴重である<sup>38)</sup>。

#### 4 コーカサス情報

『世界を飾るアッバースの歴史』も、アッバース一世の北西イラン・コーカサスにおける軍事行動について、詳しく述べている。しかし、『歴史の精華』第三巻は、実際にこの地の行政の文官最高責任者（ファズリーはカラバフ Qarābāgh 州バルダ Barda' とグルジア・カヘティ Kakheti のヴァズィール職を務めた）の地位に就いていた人物が、直接執筆した作品である。イランとコーカサス諸民族の関係を大きく変容させ、そして規定したアッバース一世期に、その最前線にあったフ

ァズリーが詳細な記述を残していることはごく自然であり、この年代記の価値を大いに高めている。記述内容は今後の研究に大きな影響を与えていくと考えられる。

また、細部にこだわるファズリーの性格は、彼が長年過ごしたこの地域の記述にもっともよく表れている。とりわけ、サファヴィー朝にとって、フロンティアとして大きな存在であったグルジアに関して、その知的関心は遺憾なく発揮された。例えば、ファズリーは、グルジア人が神を表す言葉 **آقمرت** (AT III, fol.186a) に言及している。これは、グルジア語で神を意味する言葉 **აღმერთი** **ghmert-i** をペルシア語風に表記したものである。ファズリーは、他の箇所でも「彼ら(=グルジア人)の言葉を知った」カラバフのキズィルバーシュがグルジア軍の裏をかく話など、物語的なエピソードではあるが、当時の言語文化事情や習俗を知る上で貴重な記述を残している<sup>39)</sup>。

以下は、北西イラン・コーカサス地域に関係する地名や人名(総督など)が含まれた小題について、参照フォリオをまとめたものである<sup>40)</sup>。

アルダビール	55b; 64b; 87b; 95a; 180a; 185b; 220a; 283b; 299b; 381b; 422a; 550a
ガラーチェダグ Qarāchedāgh	28a; 55b; 63a; 272b;
アゼルバイジャン (タブリーズ Tabriz)	28a; 49a; 52b; 151a-b; 180a; 181b; 188b; 244a; 263b; 267b; 271b; 279a; 280a; 295b; 316b; 360a; 381b; 386a; 425a; 454b; 478b; 484a; 488a-b; 515a; 518a;

↗ ーンギール王の親書の写し」として繰り返し引用されている。  
 37) Navā'i 1367, vol. 3: 313. このジャハーンギールからの返書のもととなった、アッバース一世のバグダード征服を告げる親書は、Navā'i 1367: 432-434 に記載されている。  
 38) Melville 2003: 89-90; Islam 1970: 78-84.  
 39) グルジア国史にとってペルシア語年代記は必須の史料である。『歴史の精華』第三巻の発見はグルジア国史研究にも大きな影響を与えることになるであろう。前田 2004 は、シャー・アッバースの対コーカサス政策について、この新史料の記述を中心に検討したものである。  
 40) AT III, fols.412b-465b まで、ほとんどの小題が空白のまま残されているが、この箇所に関しては、内容を吟味して、詳細な記述が見られる場合は表に加えた。また、小題で言及されていない ↗

チョフーレ・サアド Chokhūr-e Sa'd (イレヴァン Īrevān)	155a; 156a; 161b; 169b; 176a; 203a; 211a; 244a; 269b; 275b; 361b; 362a; 365b; 369b; 371a; 380b; 386a; 484a; 513a;
ガラーパーグ (ギャンジェ Ganje, エリスバール Erisbār)	28a; 34b; 151a-b; 156a; 165a; 194b; 197a; 203a; 244a; 252a; 269b; 335a-b; 336a; 346a; 348b; 349b; 354b; 357b; 371a; 372a; 379a; 496b; 507b;
シールヴァーン (シャマーヒー, シャッキー Shakkī)	51b; 57a; 171a; 178a; 185b; 203a; 206a; 215b; 220a; 245b; 258a; 339b; 348b; 349b; 378a; 515a; 518a;
グルジア Gorjestān (トビリシ Teflis, カルトリ Kārtīl, カヘティ Kākht, スーラーム Sūrām, アーヘスゲ Ākhesqe, パーシー・アーチューグ Bāshīāchūq)	156a; 171a; 178a; 185b; 200b; 203a; 241b; 244a; 267b; 284b; 307a; 311b; 316b; 320b; 322a; 323b; 327a; 328a; 329a; 330b; 331b; 332a; 334a; 335a-b; 346a; 349b; 354b; 373a; 380; 427a; 491b; 494a; 496b; 498a-b; 500b; 504a; 505a; 507b; 509a; 515a;
コーカサス以北 (キプチャク平原 dasht-e Qepchāq, ダゲスタン Dāghestān, アルボルズ山 Kūh-e Alborz, シャープーラーン Shāpūrān, タバルサラン Ṭabarsarān)	84b; 206a; 245b; 258a; 299b; 544a; 546b;

この他にも、ゲゼルアーガージュ (AT III, fol.95a), シューレゴル Shūregol (AT III, fol.168b), ヴァーン Vān (AT III, fols.169b, 181b), ナフジェヴァーン Nakhjevān (AT III, fols.185b, 352b), バークー (AT III, fol. 206a), カルス Qārş (AT III, fol.211a) といった地名が小題の中に含まれて言及されている。

数ある詳細な記述の中でも、特に情報価値が高いと考えられるのは、グルジアが生んだ傑出した人物の一人、ギオルギ・サアカゼ Giorgi Saakadze に関する記述である。サファヴィー朝とオスマン朝をまたにかけて活躍したこの政治家は、シャー・アッパース一世と深い因縁を有していた。彼は、士族階級であるアズナウリから身を起し、グルジア・カルトリ王ルアルサブ二世の義兄として王国の実権を握るが、有力貴族との抗争に破れ、アッパース一世の宮廷に亡命した。サアカゼ

は、アッパースの腹心として活躍するが、後にグルジアで反乱を主導し、サファヴィー朝軍を撃破して勇名を馳せる。オスマン朝に亡命後も厚遇され、対サファヴィー朝遠征に同行するも、最後は叛意を疑われてオスマン朝軍司令官に処刑された<sup>41)</sup>。

エスキヤンダル・ベイグは1625年にグルジアで反乱をおこすまで、サアカゼについてほとんど触れていない。しかし、オスマン朝に亡命した後の彼の行動について触れる中では、サファヴィー朝の事情に良く通じたオスマン朝軍の案内者として、重要視する記述がみられる<sup>42)</sup>。実際に、サアカゼはグルジアで反乱を起こすまで、十数年にわたってシャー・アッパース一世の傍近くに仕えていた。ただし、こうした事情については、断片的にしか知られてこなかった<sup>43)</sup>。

ファズリーは、サアカゼがサファヴィー朝宮廷に亡命したことを、1021/1612-13年の

↗ (すなわちこの表で記していない) 箇所でも、任免や使節の往来など、この地域と関連する記事が載っている場合がある。ギーラーンなどカスピ海沿岸の情勢や他の西方国境、ロル人やクルド系諸将の動き、バグダード情勢など、北西イラン・コーカサスの情勢は周辺諸地域と密接に関連していた点も考慮しなければならない。なお、メルヴィル博士は、ファズリーがグルジアへの自らの関与について述べている箇所のみ、論文の中で指摘している (Melville 2003: 89 n.107)。

41) この人物については、Zhamburia 1964 が詳しい。前田 2003: 41-42 も参照のこと。

42) ZTAA: 29-30.

43) サアカゼに関する一伝記『大モウラヴィ伝 *Didmouraviāni*』がまとめられたのは、17世紀後 ↗



記事の中で伝えている (AT III, fol.311b)。この中で、彼が亡命するに至った事情、そして、グルジア王の叛意をシャーに告げたことなど詳細に記している。さらに、イランの諸事の柱石だったエスファンディヤール・ベイグ・アラブギーラー *Esfandiyār Beyg Arabgīrlū* 死去後、シャーの最も近い側近であったと具体的に述べている (AT III, fol.482b)。また、ルアルサブ二世の妃となったサアカゼの姉妹の美しさを目撃談として記したり、シャーに仕えていた弟ケイホスロウがバグダード攻防戦で戦死した現場に居合わせた記述など、グルジア語史料も伝えていない独自の情報を多く含んでいる (AT III, fols.311b, 461a)。

サアカゼが反乱を起こしたのは、彼が摂政 *vakīl* 職を務めていたカルトリ王シモン二世とシャー・アッパース一世の孫娘の婚姻が盛大に執り行われている時期であった。ファズリーは、マーザンダラーンからグルジアに至るまでの花嫁の輿入れの模様を特に詳細に記している。そして、この反乱の一部始終は、サファヴィー朝軍が壊滅した後の自身の逃避行も含めて生々しい記述を残しており、第一級の史料価値があるだろう (AT III, fols.491b-509a)。

ファズリーはグルジア人についてのみ記しているわけではない。アルメニア人商人とユダヤ商人に特権を保証した 1028/1619 年に発令された絹貿易の国家独占を命じる勅書の写しは、メルヴィルが指摘するように、この写本のみが伝えている (Melville 2003: 79)。ゴラームに関しても、アルメニア系出自の有力ゴラーム、ガルチャガーイーの来歴について、『世界を飾るアッパースの歴史』より具体的に記述している (AT III, fol.47b)。また、ガルチャガーイーが、シールヴァーン総督のゾルフアガール・ハーンを王命により殺

害した後、同総督職が幼馴染の狩猟長官 *mīrshēkārbāshī* ユースフ・ハーン *Yūsuf Khān* に与えられたことを不服として、一時的にオスマン朝の影響下にあった北コーカサスに出奔したことを伝えている。エスキャンダル・ベイグはこのエピソードに触れていないものの、ミールザー・ベイグは、オスマン朝への亡命を図ったとして詳しく記していることから、少なくとも世間に流布していた話と考えられる (RS: 813-14)。

また、ダゲスタンやオセチア等、北コーカサスに関しても、集団名を連ねたり、シャーとの姻戚関係について触れるなど、非常に詳しい。マーザンダラーンに強制移住させられていたグルジア人、アルメニア人についても、エスキャンダル・ベイグはほとんど記していないが、対照的にファズリーは独自の記述を多く残しており、大いに注目できる (AT III, fols.367b-370a)。

#### IV 結びにかえて

本稿では、近年新たに発見されたペルシア語史料『歴史の精華』第三巻を取り上げ、主にエスキャンダル・ベイグの年代記と比較することで、その記述内容の特徴について分析を加えた。その際、家族関係に関する記述、王族に関する記述、行政・外交に関する記述、コーカサス情報の4つの特徴に整理して論じた。

ファズリーの年代記の特徴は、メルヴィルも指摘するように、人物情報の豊富さと著者自身の経験を反映した記述にある。しかし、それは単に著者の性格に由来するものではない。ファズリーとエスキャンダル・ベイグの年代記を比較すると、二人の年代記作者のスタンスの違いが鮮明であることに気づく。アッパースの歴史を描く(ことを委嘱され

↗ 半のことである。ペルシア語史料では、『サファヴィー家の庭園』が、アッパース一世の側近として仕えていたことを伝えている (RS: 889. ただし、反乱を伝える記事の中である)。

た<sup>44)</sup> エスキャンダル・ベイグが、あくまで役職にある個人が果たした宮廷における役割を記しているのに対し、ファズリーはより「私的な」立場から、各エリート家族や集団の社会的なまとまりに注目して、その浮沈を念頭において王朝史を述べていると考えられる。

そのために、母系の親族や王家の女性の動向について注意を払うのは、ファズリーにとってごく自然なことであっただろう。こうした細かな記述の数々は、サファヴィー朝で活動した様々な社会集団内部の多様性を浮き彫りにする。コーカサスに関する記述を紹介する中でも触れたが、ファズリーの年代記のこうした特徴は、外交使節や亡命者などをもてなす宮廷の接待の様子や、オスマン朝におけるサファヴィー朝使節の扱い、あるいは異国人の習俗に関する記述において遺憾なく発揮されている。こうした云わば、差異に注目し、細部へと向かう視線の持ち主であるファズリーの著作を利用することにより、流麗な筆致ながらも、平板な記述の目立つエスキャンダル・ベイグの年代記を大いに補うことができ

るのである。

また、行政官僚としてのファズリーと一族の経歴を反映した外交や行政に纏わる記述からは、アッパース一世期サファヴィー朝国家の姿とそれを取り巻いていた国際関係についても、新たな知見を得ることが可能である。官僚の任免に関する記述や具体的な数値をあげて語る姿勢は、サファヴィー朝期行政のあり方を捉えなおす一つのきっかけを提供するに違いない。

このように、ファズリー個人の知識と経験が生かされたこの新発見の第三巻こそが、まさしく『歴史の精華』の本編と呼ぶにふさわしい。その語り口は時に饒舌でエピソードや数値にはにわかには信じがたい記述も少なくない。しかし、『歴史の精華』第三巻の発見は、アッパース一世の治世におけるサファヴィー朝社会を多方面から再検討する作業の出発点となると結論づけることができる。

[附記] 本稿は、平成15年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

## 史料略号

- AT III: Fazlī Khūzānī al-Eṣfahānī, *Afzal al-tavārikh*, University of Cambridge, Ms.Dd.5.6.  
 KhB: Moḥammad Yūsuf Vāle Eṣfahānī, *Khold-e barīn*, British Library, MS. Or. 4132.  
 KhS: Moḥammad Ma'sūm b. Khwājegi Eṣfahānī, *Kholāṣat al-siyar*, ed. by Īraj Afshār, Tehran, 1368.  
 KhT: Qāzī Aḥmad Qomī, *Kholāṣat al-tavārikh*, ed. by Eḥsān Eshraqī, 2vols., Tehran, 1363.  
 RŞ: Mirzā Beyg Jonābedī, *Rouzat al-Ṣafaviye*, ed. by Gholāmrezā Ṭabāṭabāī-Majd, Tehran, 1378.  
 TA: Jalāl al-Dīn monajjem, *Tārikh-e 'Abbāsī*, ed. by Sayf-allāh Vaḥīdniyā, Tehran, 1366; British Library, MS. Or. 6263.  
 TAA: Eskandar monshī, *Tārikh-e 'ālam-ārā-ye 'Abbāsī*, ed. by Īraj Afshār, 2vols., Tehran, 1350; Savory 1978-86: *History of Shāh 'Abbās the Great*, tr. by Roger M. Savory, 3vols., Boulder, Colorado.  
 ZTAA: Eskandar Beyg Torkamān shahīr be monshī va Moḥammad Yūsuf moavarrekḥ, *Ẓeyl-e tārikh-e 'ālam-ārā-ye 'Abbāsī*, ed. by Soḥaylā Khwānsarī, Tehran, 1317.

44) ファズリーは、エスキャンダル・ベイグが1010/1601-02年に公式の年代記を残すよう王命を受けたことを伝えている（AT III, fol.136a; Melville 2003: 86-87）。

### 参 考 文 献

- 近藤信彰 2000 「イラン，トゥラン，ヒンドーペルシア語文化圏の発展と変容」『岩波講座世界歴史 14：イスラーム・環インド洋世界 16-18 世紀』岩波書店：93-114。
- 羽田 正 1987 「フーザーニー家の人々—東方イスラーム世界における一家の歴史」『史学雑誌』96(1)：37-67。
- 前田弘毅 1998 「サファヴィー朝期イランにおける国家体制の革新—「ゴラーム」集団台頭の歴史的意義について」『史学雑誌』107(12)：1-38。
- 1999 「サファヴィー朝の「ゴラーム」—「グルジア系」の場合」『東洋学報』81(3)：1-32。
- 2003 「グルジア・ナショナリズムの源流—17 世紀叙事詩『タイムラズとルスタヴェリの対話』の意味すること」帯谷知可・林 忠行編『スラブ・ユーラシア世界における国家とエスニシティ II』，37-44。
- 2004 「シャー・アッパース一世の対カフカス政策」『史学雑誌』113(9) (刊行予定)。
- Falsafi, Naṣrallāh. 1371. *Zendegānī-ye Shāh 'Abbās-e avval*, 5 in 3 vols. Tehrān.
- Haneda, Masashi. 1989. "La Famille Ḥūzānī d'Isfahan" *Studia Iranica*, 18: 77-92.
- Islam, Riazul. 1970. *Indo-Persian Relations: A Study of the Political and Diplomatic Relations Between the Mughul Empire and Iran*. Tehran.
- Maeda, Hirotake. 2001. "Ḥamza Mirzā and the 'Caucasian Elements' at the Safavid Court: A Path toward the Reforms of Shāh 'Abbās I" *Orientalisti*, 1, Tbilisi: 155-171.
- . 2003. "On the Ethno-Social Background of Four Ghoālm Families from Georgia in Safavid Iran" *Studia Iranica*, 32: 243-278.
- Melville, Charles. 1998. "A Lost Source for the Reign of Shah 'Abbas: the *Afzal al-tawārikh* of Fazli Khuzani Isfahani" *Iranian Studies*, 31/ii: 263-265.
- . 2003. "New Light on the Reign of Shah 'Abbās: Volume III of the *Afzal al-Tawārikh*" *Society and Culture in the Early Modern Middle East. Studies on Iran in the Safavid Period* (A. J. Newman, ed.), 63-96, Leiden-Boston:.
- Navā'ī, 'Abd al-Ḥoseyn. 1367. *Shāh 'Abbās*, 3vols., Tehrān.
- Savory, Roger. 1978-86: See TAA.
- Storey, C.A. 1972. *Persian Literature: A Bio-Bibliographical Survey*; Translated into Russian and Revised, with Additions and Corrections, by Yu.E. Bregel, Moskva.
- Szuppe, Maria. 1994, 1995. "La participation des femmes de la famille royale à l'exercice du pouvoir en Iran safavide au XVI<sup>e</sup> siècle (1)" *Studia Iranica*, 23: 211-258; part 2: *ibid.* 24: 61-122.
- Zhamburia, Givi. 1964. *Giorgi Saakadze*, Tbilisi.

## 『歴史の精華』第三巻構成表

fol.1b~	冒頭部（アッパースの即位に関する記述，破損していた冒頭部に『世界を飾るアッパースの歴史』の序文を補ったものと推定される）	
fol.7a~	目次	
fol.20a~	亥年（治世1年目）の記述	995-96/1587-88年 <sup>45)</sup>
fol.22a~	子年（治世2年目）の記述	996-97/1588-89年
fol.29b~	丑年（治世3年目）の記述	997-98/1589-90年
fol.40b~	寅年（治世4年目）の記述	998-99/1590-91年
fol.48b~	卯年（治世5年目）の記述	999-1000/1591-92年
fol.55b~	辰年（治世6年目）の記述	1000-01/1592-93年
fol.64a~	巳年（治世7年目）の記述	1001-02/1593-94年
fol.81a~	午年（治世8年目）の記述	1002-03/1594-95年
fol.85a~	未年（治世9年目）の記述	1003-04/1595-96年
fol.94b~	申年（治世10年目）の記述	1004-05/1596-97年
fol.104a~	酉年（治世11年目）の記述	1005-06/1597-98年
fol.111a~	戌年（治世12年目）の記述	1006-07/1598-99年
fol.119a~	亥年（治世13年目）の記述	1007-08/1599-1600年
fol.127a~	子年（治世14年目）の記述	1008-09/1600-01年
fol.133b~	丑年（治世15年目）の記述	1009-10/1601-02年
fol.143a~	寅年（治世16年目）の記述	1010-11/1602-03年
fol.149b~	卯年（治世17年目）の記述	1011-12/1603-04年
fol.161b~	辰年（治世18年目）の記述	1012-13/1604-05年
fol.176a~	巳年（治世19年目）の記述	1013-14/1605-06年
fol.196b~	午年（治世20年目）の記述	1014-15/1606-07年
fol.209b~	未年（治世21年目）の記述	1015-16/1607-08年
fol.228b~	申年（治世22年目）の記述	1016-17/1608-09年
fol.239b~	酉年（治世23年目）の記述	1017-18/1609-10年
fol.257b~	戌年（治世24年目）の記述	1018-20/1610-11年
fol.286b~	亥年（治世25年目）の記述	1020-21/1611-12年
fol.303b~	子年（治世26年目）の記述	1021-22/1612-13年
fol.313b~	丑年（治世27年目）の記述	1022-23/1613-14年
fol.324b~	寅年（治世28年目）の記述	1023-24/1614-15年
fol.340a~	卯年（治世29年目）の記述	1024-25/1615-16年
fol.353b~	辰年（治世30年目）の記述	1025-26/1616-17年

45) ヒジュラ暦，西暦の順に記した。なお，暦については，Melville 2003: 78-79も参照のこと。

fol.377a～	巳年（治世 31 年目）の記述	1026-27/1617-18 年
fol.384b～	午年（治世 32 年目）の記述	1027-28/1618-19 年
fol.404b～	未年（治世 33 年目）の記述	1028-29/1619-20 年
fol.412a～	申年（治世 34 年目）の記述	1029-30/1620-21 年
fol.418b～	酉年（治世 35 年目）の記述	1030-31/1621-22 年
fol.431b～	戌年（治世 36 年目）の記述	1031-32/1622-23 年
fol.453a～	亥年（治世 37 年目）の記述	1032-33/1623-24 年
fol.473a～	子年（治世 38 年目）の記述	1033-34/1624-25 年
fol.490a～	丑年（治世 39 年目）の記述	1034-35/1625-26 年
fol.526～	寅年（治世 40 年目）の記述	1035-36/1626-27 年
fol.541～	卯年（治世 41 年目）の記述	1036-37/1627-28 年
fol.549～	辰年（治世 42 年目）の記述	1037-38/1628-29 年
fol.565b～ fol.579a	高官の一覧表	